

イネ縞葉枯病の被害抑制に向けた防除対策の推進

県西農林事務所経営・普及部門

イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病で、昭和40～60年頃に多発して問題となりました。

近年、本病が再び多発傾向となり、当部門管内では平成23年頃から被害が目立つようになっています。特に筑西市での発生が多く、ほ場によっては減収も見られることから、地域ぐるみでの防除対策に取り組みました。

ヒメトビウンカ防除技術の実証

平成26、27年に、水稻の育苗箱施薬および本田防除の防除効果を確認しました。その結果、育苗箱施薬の防除効果が高いこと、また、イネ縞葉枯病の多発地で、育苗箱施薬による初期防除だけでは被害が防ぎきれない場合には、本田防除の併用が有効であることがわかりました。この結果を水稻栽培講習会等で生産者に周知しました。



コムギでの航空防除

ヒメトビウンカ防除対策の啓発・啓蒙

平成26年度に実施した水稻関係の講習会などで、ヒメトビウンカ防除に有効な育苗箱施薬について広く啓発し、実施を働きかけました。その結果、田谷川土地改良区内では、コシヒカリ作付けのほぼすべて（99%以上）で育苗箱施薬が行われました。平成27年度も同様に2月～3月に実施した各種講習会、検討会等で次作に向けた防除対策の指導を行いました。

また、イネ縞葉枯病の防除対策を地域全体で進めるため、28年1月にチラシを作成し、管内市町村やJAから農家へ配付しました。その結果、管内の育苗箱施薬の実施は年々増加しています。



講習会で対策を周知

コムギでのヒメトビウンカ防除

平成27年5月21日に、田谷川土地改良区内に作付けされているコムギにおいて、無人ヘリによる赤かび防除時（第2回目）に、ヒメトビウンカの同時防除を行いました。その実施面積は162haで、同土地改良区内に作付けされているコムギのほぼすべてにあたります。本防除の実施により、コムギ畠でのヒメトビウンカ数を散布前の15%まで低減できることを確認しました。

平成28年1月
イネ縞葉枯病の発生が拡大しています

イネ縞葉枯病の発生が拡大しており、さらに被害が進むと予想されます。減収を防ぐため、地域ぐるみでヒメトビウンカの防除を行いましょう。

イネ縞葉枯病とは

- ヒメトビウンカが媒介する病害です。ワイルス病なので発病後の治療は不可能。
- （A）感染すると、葉に縞状の斑紋が現れます。
- （B）分け隔離には葉先がこよりれて下がり始める様子です。
- （C）茎葉には網状の斑紋が現れ、子葉や葉身と共に萎縮します。
- ・発病初期の葉からでも発病が見られます。

イネ縞葉枯病の発生

- ワイルスが各部位に侵入（「毒毒害」）がイネを複数することで発生します。
- さらに感染後はヒメトビウンカのワイルスが繁殖し、葉全般が枯れることで感染が広がります。このワイルスは次の世代のワイルスに持ち込まれられます。
- ・種子でのワイルス伝播はありません。

防除するには

- ・ヒメトビウンカの防除を行いましょう
- ・ヒメトビウンカが重要な役割を果す環境整備活動で、秋刈りを実施してください。
- ・ワインの防除を行なうことで飛翔距離を短めにすることで、越冬の抑制があります。
- ・播種主体はヒメトビウンカを減らすために、播前防除時にヒメトビウンカを駆除を行いましょう。
- ・季田での防除活動（5月上旬～中旬）や播前防除（5月上旬～下旬）に行ないましょう。播前防除の方法では、イネ縞葉枯病を防ぐ効果は高くあります。
- ・イネ縞葉枯病の発生状況を把握しましょう。
- ・育苗箱で育てた場合、育苗箱を定期的に換気しましょう。
- ・育苗箱の換気口は、育苗箱を定期的に換気しましょう。
- ・育苗箱の換気口は、育苗箱（苗からなる）を換気しましょう。
- ・小麥などの防除にふるまえ。
- ・ヒメトビウンカの越冬場所となる小麥などの防除技術、育苗箱（苗からなる）に取り組みましょう。

地域が一丸となり、防除に取り組む事が重要です！

（参考）参考資料：内閣府農林水産政策監修委員会（農林水産政策監修委員会）（農林水産政策監修委員会）（農林水産政策監修委員会）（農林水産政策監修委員会）

チラシを作成して対策を周知